

前號大和歌の評

江 楠 生

鬼取摧ぐ業に達し乍ら、敷嶋の道にたへなるこそいみじけれ。われ前號氷川子の大和歌を見るに、其調べいと優に、其詞皆味ありて、よも子の刀業の鋭さに譲らざめりと感じ合ひぬ。立秋風の古雅なる、移し植えし云々の耳障りなきハ云ふも更なり、中なる二つ、げに來んと云ひて來ざりし時の心地、別れて後に音づれ待つ程の床しさ、うたへ出て残すなし。われらハ只子が、行末長く、此園の爲めに務められんことをなん望む。次に松露生の夕さればの歌、暮色おもむろに遠きより至り、海風松樹を吹て、淋しさ言はん方なきさま、見るが如くなれども、其秋と云ふ題意を、ほとく含まざるハいかになや。題をのきてハいつ頃の節にや、感ふ人も多からん。固より淋しさの句ハあれども、夕ぐれハ春にまれ冬にまれ、なべて淋えらぬかは。あはれ松原夕嵐などありたらんハ、あるは濱風を秋風にまたらんにハ一點の批難もなからんに、惜哉。其並びなるすゞしさにの一首松露生の歌としてハ、恐くは不出來ならん。夏を忘れて夕涼みなどの句、秋にハ少しふさはしからずかし。すむなりの語も、夕月としては、人の感をひくこと薄からん。思ふに、これ題のまがひにはあらざるか。百合の歌別に難なし。朝ぎりのハ、第二句朝たちゆけばの數文字、生の重きを置く所ならん。四五句にうけたる駒の聲、あからさまの考にてハ、「あを駒のあがきを早み」などいへる名歌もあれば、どもせば生の乗れる馬にやあらんと、感へども、繰返しねもごろに味へば、なうくハにこと人の駒の、霧中嘶き近づく風情、ありくど寫し得ておかしともおかし。次に中内君の羈中曉鐘、いつもながら物悲し。これを讀むもの、誰か第三十一號の、客舎夜雨を、思ひ出でざらめやハ。君の故郷を思ふ情の、如何に切なるうハ、愚かなるわれ乍ら推し侍る。われ今君を數ある悲觀的人物と見るは僻目か。あまりに故郷をな思ひぞ。思ひハ体の

毒どかや。まからんよりも、心爽かにして學ぶこと、却てたらちねへの孝行ならめ。秋月の歌、松露生の夕さればと同斷、やゝ題に外れて覺ゆ。なべて秋の月は、あはれこよなき風色かな、など打眺め打はれて、其清けさに、吾を忘るゝばかりなる所をこそ讀まめ。風のまに／＼、雲搔きわけて月の出るは、四時あり勝のことなり。されど、秋の字をよきて、只月とまたらんには、かの『雲晴れて後の光と思ふなよもとより空に有明の月』と云へる、古の名だたる歌にもかよひて、極めてめでたきものとならん。さすれば『白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちりに染むらん』などの歌と並べ唱して、人固より明德あれば、教によりて、いかやうなる人にも成立べき由を、幼な心もてる人に、知らする一助ともなりなまし。作者はかゝる意、ありしやあらざりしや、いかに。偕又彌生子、由來歌人ならず。さるに前號ゆくりなくも、かの玉歌三首に接す。其さえしきの然らまむる所といひへ、豈にこれが原因たるものなからんや。所謂情物に觸れて、打によぶ聲の、自ら詞をなせるものならざるを得んや。されば、よしもなきこと歌とは異にして、句々皆意味深長、容易に端倪すべからざるを見る。げにふきわたるなごり、けさ言たつる、あなうよの中などの語、其眞意ありやなしや、知る人ぞ知らん。

顧みればわれ此道に取りては難波津の何さわかまふるこ無けれど例の物好み癖押へ離くて淺香山のあまはかにも拙なき筆もてかくは評しぬ希くば大方の諸彦我罪を深くな咎め玉ひうあなかし。

『文學上ニ於ける現時の國家主義』を讀む 晚天窟主人

世に一種の空想家あり、靜夜蒼天を仰いで宇宙の壯大なるに驚き、燦然たる星辰徽光を垂れて高く麗るを望み、獨り自ら天地の秘奥に冥契したりと誤想し、揚々として其歩を移し、遂に脚を失して溝壑